古代エジプト先王朝時代の首斬りとその象徴性
―初期王朝時代以前の王権との関係―

橋本　幸実

はじめに

古代エジプトの宗教儀礼には、先王朝時代（紀元前 4500 年頃から紀元前 3000 年頃）からその原型が認められるものがあり、人身供犠もその一例とされている。人間を犠牲にする儀礼には様々な背景や方法があるが、先王朝時代から初期王朝時代（紀元前 3000 年頃から紀元前 2686 年頃）にかけて考古学的に確認されている首の無い遺体やナルメル王の奉納用パレットなどに描かれた図像、「ウェストカー・パピルス」の魔法使いジェディの物語の内容などからは、当時古代エジプトにおいて首を斬ることによる殺害方法が用いられていたと考えられている。しかしながら、世界各地における首狩りに関する先行研究などを確認する限り、古代エジプトにおける儀礼的な首斬りの議論はなされてこなかった。そこで本論考では、王権の強化に結び付く人身供犠の一要素である首斬りを主題とし、先王朝時代から初期王朝時代の葬送や図像を中心に首の象徴性や儀礼としての側面を整理する。また古王国時代以降の関連事例や他地域の事例との比較も行い、首の持つ「呪力」という概念によって、首を斬る行為が神への生贄のみならず、葬送儀礼や政治的儀礼としての側面を備えていたことを明らかにする。以上のことから、古代エジプトにおいて先王朝時代から行われてきた首斬りの儀礼が首の持つ呪力への畏れによって地域の慣習となり、ナルメル王の奉納用パレットの図像にみられるような古代エジプト王権と結びつく儀礼へと発展した可能性を検討することで、新たな説を提案する。

第１章　古代エジプトの儀礼と首斬り

古代エジプト宗教の基本要素として知られる多神教的な信仰や儀礼、呪術などは、先王朝時代からその萌芽が認められ、その中には古代オリエントの暴力性を示す事例とみなされてきたものも存在する。その代表が古代エジプトの統一国家形成期の人物として知られるナルメル王の奉納用パレットであろう。そこにはパレットの表面と裏面それぞれに二つの勢力の争いや王権を想起させる様々な図像が描かれているが〔図 1〕、中でも王と思われる人物によって敵兵が倒されていく場面や、敗北した兵士の遺体が頭部を切断された状態で並べられている場面はよく知られている[1]。ヒエラコンポリス出土の象牙板にみられる斬首された遺体の図像〔図 2〕や王墓地における殉葬、ギリシア人著述家が記述した第 1 王朝の「赤い男」の生贄を捧げたという伝説[2]や、それに関連すると思われる古王国時代の「赤い牛」の生贄、「赤い壺」を破壊する儀式[3]なども特異な宗教的行為の例に挙げられる。

このような宗教的儀礼・慣習は、しばしば古代のギリシア世界から近代の西欧にかけて「原始的」で「未開」の文化を持つ人々の行いとも認識されてきた。しかしながら森羅万象に不可視の力が存在すると信じられた古代エジプトにおいて、図像や文字、儀礼行為として形にされたそれらの宗教的概念は、先王朝時代から初期王朝時代へと受け継がれ、王すなわち先祖たる神々から受け取った世界の秩序を維持する支配者という伝統的な王権に欠かせない要素であったと言える。またエジプト学の先行研究で業績をなした研究者の間でも、西欧社会から古代エジプトの宗教的観念への一方的な眼差しに異を唱えた者もいた。特にアフリカや西アジア地域の文化研究にも寄与したことで知られる H. フランクフォート（Frankfort）は、著書の中で古代エジプト史に関する従来の説を否定する立場をとっている。すなわち古代エジプト文明とは神の化身たるファラオを頂点とする王朝が成立した初期段階を文明の発展途上の状態とみなし、ピラミッドが建造された古王国時代をピークとして繁栄し、その後は過去の栄光が遺した大枠の中で「生ける屍」として延命し、人々は国内の圧政・紛争や外国人王朝の支配という憂き目を見続けることとなったという言説を、古代ローマ人の子孫であることを誇りとするヨーロッパおよびキリスト教圏の価値観に基づく思考であると批判している

のだ[4]。また彼は古代エジプト王朝の繁栄の基礎となった多くの要素は国家成立の段階で既に確立されており、古代エジプト人から見れば初期に始まった伝統に基づいた王権支配は、各個人の自由を損なうものではないと感じていたであろうと考察している[5]。

直接的であれ間接的であれ他者の生命あるいは身体を損なう儀礼およびその行為の図像を表現することは、古代ギリシア人や現代日本人を含め、そのような儀礼、習俗を持たない者から共感されることは困難である。しかしながら史料・資料の存在は、先王朝時代以降の古代エジプトにおいてそれらが何らかの重要な意図を持っているものであると理解されるべきであろう。本論考では王権の強化に結び付く人身供犠の実情を明瞭にするため、特に先王朝時代から初期王朝時代の遺体や図像を主題として、それらに確認される首斬りの儀礼とその意味を整理し、それらを初期王権と関連付けて新たな説を提案する。

現存する古代エジプトの文書のうち首斬りを想起させる代表的なものとしては、ベルリンのエジプト博物館に所蔵されている文書「ウェストカー・パピルス」の物語が第一に挙げられる。現存する写本はヒクソス支配下の紀元前 1600 年前後に製作されたが、その原本は第 5 王朝成立直後の紀元前 2500 年頃の口頭伝承を基にして、中王国時代第 12 王朝の紀元前 2 千年紀には既に記されたと考えられている。神官や魔術師と王朝に纏わる逸話が収められたこの作品の中でも、クフ王と魔法使いのやり取りを描いた驚異譚はよく知られている。退屈していたクフ王は幾人かの息子の一人からトト神の知恵を持ち不思議な術を用いるという魔法使いの老人ジェディの噂を聞きつけて興味を抱き、王宮に連れて来させる。王は囚人を用意し、その囚人の首を切断すると告げる。そしてジェディに魔術によって切断された首を再び胴体に付け蘇らせてみせるように要求するが、彼は「（神の）聖なる家畜」すなわち人間を殺すことは禁じられていると王の命を拒否する。代わりに二種類以上のガチョウ、雄ウシが順に首を落とされた。その度にジェディが呪文を唱えると、それら動物の体と首が独りでに合体して蘇生したため、王を満足させたことでこの件は落着した[6]。

この物語では、主要な登場人物であるクフ王と魔法使いジェディを通じて人命の犠牲に対する正反対の認識が見出される。まずクフ王の要求は権力に

よって自己の欲求のために他人の生命を犠牲にしようとする意図を持つ。ただしこれは物語の制作当時より前に死去していたクフ王を否定的な人物像として伝えるため暴君として描写した結果であることには留意しておきたい。クフ王はギザの大ピラミッドの建造によって古代エジプト史の中でも大いに知られる人物ではあるが、アビドスの神殿跡から出土した象牙製の小像以外には、断片的なレリーフや彫像、ギザ出土の碑文にその姿が確認されるのみで、一人の人間としての実像を詳細に知る手掛かりは多くはない。王が人命の価値を認識しない一方で、不思議な魔術や予言で王を驚嘆させる魔法使いジェディは、たとえ太陽神の息子であるファラオとして絶対的な権力を持つクフ王の命であっても、人間は神の所有物であり、その生命を無意味に断つことは神に背く行為であると囚人の斬首を阻止する。「ウェストカー・パピルス」において、この魔法使いは執筆者の倫理観を体現する人物として登場しているとみなすことができる。

このような文書はそれ以前に実際に首斬りが行われていたことを反映しているのだろうか。先王朝時代の墓からは、そのような事例とみなされる遺体が発見されており、遺体の切創痕には、頸椎のいずれかの位置に切り傷があるものと、ナルメル王の奉納用パレットなどのように完全に頭部と胴体を切り離しているものがある[7]。同パレットに描かれた敵兵は頭部を彼ら自身の脚の間に置かれている図としてよく知られている。これらの遺体の持ち主は戦勝あるいは葬送の儀式の中で殺害されたと考えられており、しばしば首狩りの犠牲者ともみなされてきたが、この表現が中心的なテーマとしてこれまで議論されることはなかった。首狩りとは英語のヘッド・ハンティング（Headhunting）などの語の訳語であり、民俗学においてこの首狩りは次の2つに分類されることから、本論考での呼称とともに最初に紹介しておきたい。

1つ目は「目的としての首狩り」である。これは純粋に頭蓋を獲得するために不意に他者を襲いその首を収奪することを意味する。殺害される相手は必ずしも敵対関係にある者とは限らず、見知らぬ通行人や野外で働く人なども含まれる。この種類の首狩りは、先行研究では本格的な首狩りや「真の首狩り」と評価され、宗教民俗学から首狩りの習俗を考察した山田仁史は「狭義の首狩」に分類している[8]。

2つ目は「結果としての首狩り」で、敵対関係や政治的意図のための戦闘において倒した敵などの首を切断し持ち去ることを意味する。殺害される相手は敵兵や敵対する共同体の人々が多い。この首狩りは先行研究において「首級」とも、また「狭義の首狩」とは意図や分布の異なる別個の習俗「首取」ともみなされている[9]。また山田は、生業すなわち食物調達の種類が異なれば、首狩りの見方も異なると述べている。彼は狩猟（漁労）採集民、牧畜（遊牧）民、農耕民の首狩りの目的の違いに言及しており[10]、本論考における考察の一助となる。

例えば極寒の地や砂漠、草原、海岸など異なった場所や時代において様々な狩猟採集を営む人々は、人や大型獣、あるいは半獣や独眼など異形の姿をとり、野生の世界を支配する「動物の主（ぬし）」がいると信じており、彼らの機嫌を損ねないように狩猟を行うことに気を配る必要があった[11]。また仕留めた動物の力やその霊の復讐を恐れ、獲物に対し狩猟道具や他の民族が殺したと話し責任転嫁する例も多いという[12]。このような狩猟採集民の中で、特にロシアなど北方の人々は動物の骨には生命力が宿り新たな個体として再生する基盤になると信じた故に、とりわけ頭骨の骨格を重要視して高台や住居内外などに置く風習があった[13]。このことから、野生動物の狩猟および殺害が頭骨の呪力を畏れ敬うことと関連付けられると分かる。山田の解釈ではこの生業形態のほとんどは「首取」とみなされる。動物の飼育や繁殖を行う牧畜民には、族長が王として権力を持ち家長を中心とする大家族や家畜を守るという構造が顕著であり、このことが父なる天神を至高神あるいは唯一神とする信仰や家畜の初子の供犠の形成に関与したとされる。例えばツンドラのトナカイ遊牧、中央アジアのウマ・ヒツジ遊牧、砂漠・オアシス地域のラクダ・ヤギ遊牧、サバンナのウシ遊牧の4つに分類され、北アフリカは3つ目の分布に含まれている。しかしながら、本論考で考察する先王朝時代では、既にナイル流域において営まれていた牧畜が行われ、ウシやヒツジが飼育されており、またヒエラコンポリスなど上エジプトでは南方のヌビアからの文化交流も考えられることから、エジプトの場合は4つ目との混合型と捉えるのが妥当かもしれない。

農耕民の生業は、技術的段階から分類した場合には掘棒農耕、「初期農耕」とも評される手鍬農耕、牧畜と結び付くことの多い犂農耕の3つがあ

り、このうち手鍬農耕を営む人々の間で首狩りの事例がみられることが多かったという[14]。定住化により一定の場所に死者を埋葬するようになったことに加え、作物の生育に死と再生の循環のイメージが重ね合わせられた結果として、首を切断することによる殺害が行われたと考えられているのである。つまり頭部自体も生命力を象徴するが、首を切断した断面から流れる血液もまた生命と直結するものであり、それが大地に注がれれば作物の生長が促されるというのである[15]。日本の事例としては、佐賀の吉野ケ里遺跡から発見された首の無い人骨を巡り首狩り論争が起こり、無論明確な結論ではないものの、初期農耕民にあたる人々が共有した人や動物を殺害した際の血が作物の生長ひいては豊穣をもたらすという観念を弥生時代の人々が持っていた可能性が示唆された[16]。古代エジプトにおける生業に関しては、先王朝時代には既にナイル河流域に伝播していた牧畜文化と第1王朝初期から発展した農耕文化との融合が知られているが、首を斬るあるいは切断する儀礼が先王朝時代に既に確認されることを踏まえると、同様に古くから供犠にされた狩猟動物の殺害と類似する側面がある可能性もあると考えられるのではないだろうか。ただし本論考では山田の狭義よりも「結果としての首狩り」に近いものと考える。

古代オリエント、東地中海世界における首狩りの事例としては、フンババとメデューサが知られる。フンババは古代バビロニアの『ギルガメシュ叙事詩』において森の象徴とされる怪物で、口から火を吐き、三つ目に凝視された者は石になると考えられたが、英雄ギルガメシュらに斬首される。この怪物を退治する話は都市文明すなわち人類による森林すなわち自然の制圧と解釈されてきた。文学作品におけるメタファーの研究をしている高橋吉文は、首狩りを暗示する記号の反復に関する論文において、フンババはメデューサ退治の神話の最古の源流であると述べている[17]。メデューサは古代ギリシアの怪物三姉妹ゴルゴンの末妹で、3人の中で唯一不死身ではないと考えられた。神話の物語において、彼女が頭から蛇が生え、目を見つめられた者は石化するとして恐れられたことはよく知られている。

メデューサは先史時代から世界各地でみられる頭蓋信仰と地中海世界、中東に広がる邪視信仰の融合の一例とも考えられる。例えば三脚巴（トリスケリオン）は世界各地に古くからみられる紋であるが、シチリアにおいてトリ

スケルと呼ばれるそれには、膝を曲げた3本の脚の付け根が接する中央部にゴルゴンの顔が重なるように配置されているものがある[18]。このことは狩られた首が持つ恐ろしい力が守護する力へと転じるという考えが古代の東地中海世界にあったことを示している。

古代エジプトにおける首斬りの事例としては、1898年に発見されたナルメル王の奉納用パレットの図像、ヒエラコンポリス出土の象牙製飾り板の図像、1895年にピートリー調査隊が発見したナカダ出土の人骨[19]、1996年から2004年の間にヒエラコンポリス調査隊が発見したヒエラコンポリスの人骨[20]が主に挙げられる。本論考では、ナルメル王の奉納パレットや象牙製飾り板に表現された首の切断と提示の事例を宗教民俗学の視点から先述の議論で言及されてきた首狩りに該当するものとする。また儀礼として複数の意図が含まれる場合もあることを踏まえて、山田の「狭義の首狩り」を基準とする枠組みのみに限定されない、「広義の首狩り」の2分類のうち前者としばしば併存する可能性を秘めた後者の首狩りとみなし、本論考における「結果として行われる首狩り」に分類されると考える。以降、古代エジプトの首斬りの儀礼の事例において言及される首狩りという語は上記の意味で用いることに留意されたい。

国内の首斬りに関する議論では、古代エジプトで出土する頭部の無い遺体の多くは刑罰によるものであるとする解釈も少なくはないが、ナルメル王の奉納用パレットやヒエラコンポリス出土の象牙製飾り板のように、明らかに王権と関連付けられる遺物の中に首を斬り、それを提示する図像がみうけられる[21]。このことから、少なくとも先王朝時代から王朝開始直前の時期、古代エジプトでは王によって討ち獲られた敵の首の表象は王権を強化する要素とみなされたのではないかと考えられる。しかしながら、他の地域と比較しても、古代エジプトにおいて首を斬る、あるいは完全に切断するという行為に特化した議論は進められてこなかった[22]。本論考では首を斬るという儀礼的行為を中心に議論するが、ここで国内の研究における人身供犠の位置付けを確認しておきたい。1936年に上野専精らは、一般に宗教的態度である儀礼の一つとされる供犠について、一般的に認識される何かを捧げる儀礼に限定した場合の分類を提示している。そこでは食物や道具などモノを神に捧げることを重視するものは「供進」、一方動物や人の殺害又は破壊とその聖化

を重視するものは「厳密に言ふ」所の「供犠」とされている[23]。この定義によれば、本論考での趣旨は後者により重点を置いていると言えよう。また敵の首をその脚の間に置いて示す図像に関しては、敵を卑下する行為とも、神に捧げる儀礼的行為とも様々に解釈されているが結論は出ていない。そこで次の疑問点を提示したい。1 つ目は古代エジプト古王国時代以降の首に関連する図像から、首を収奪し示すことの意味を考察できるか。2 つ目は先王朝時代の首狩りの図像において、他人の首を斬るという行為の意味は何であったかということである。以上の 2 点について次章以降検討してみたい。

第２章　身体要素としての首と宗教的概念

古代エジプト人の信仰や葬送、慣習からは、彼らが頭部を非常に重要な身体要素と考えていたことが分かる。それ故ナルメル王の奉納用パレットに描かれた敵兵の頭部を、トロフィーヘッド（戦利首級)、すなわち戦勝記念とする解釈も妥当性があると言える。頭部の重要性を示す事項としては、まず古代エジプトでは超自然的な力を動物の頭部を持つ神として特別視したことが挙げられる。ラー、アヌビス、ホルス、バステト、セクメト、ケプリなど動物の頭部と人間の身体を持つ神や、人頭スフィンクス、蛇頭メレトセゲルなど人間の頭部と動物の身体を持つ神も多神教的信仰において知られている。また先王朝時代に権力者の墓に角のあるウシの頭部を置く慣習があり[24]、同じくウシを神聖視した南方のヌビア A 文化グループとの接触を示唆する。また極刑としての斬首も行われていた[25]。

ただし、ミイラ製作の過程からは、時代により手法は異なるものの、頭蓋の内容物である脳までもが重要な意味を持つ訳ではなかったと考えられる。肺・胃・腸・肝臓は防腐処理を施され容器に納めるなどして保存されたが、脳は腐敗が早く不要な器官として掻き出された。古代エジプト人は心臓を個人の思考を司る器官であると考えて体内に残したが、その一方で、頭蓋に守られる脳自体はさほど重要ではない内臓の一部と認識していたと言えるだろう。これらのことを踏まえると、首は古代エジプトの初期の王権や戦勝を示す表象となり得たのか、また他者の首を奪い示すことは単に生命を奪うこと以上に何を意味するのかが問題となる。そこで、首を斬るという行為に

着目して、より後代の宗教儀式や葬送に関連する事例を整理することで、先王朝時代から初期王朝時代までの首斬りから後の時代に継承された概念はあるか、またその反対に失われた概念はあるのかについて検討を加える。

古王国時代前期の私人墓の予備頭像（別名マジカル・ヘッド）〔図 3〕はこの問いを明らかにする手掛かりの一つになると思われる。これは死者の遺体に損傷あるいは消失などが起こった際に、代わりに魂が戻って来る器となると考えられた石製の頭像で、主に王族の血を引く貴族たちの葬送に際して製作された。死者の生前の特徴をよく表していることから人物像の先駆けとされるこのような像は、頭部が持ち主の存在を集約することも示唆している[26]。この頭部像の本来の意味と役割についてはこれまでに様々な説が唱えられてきた。例えば、建設事業を行ったクフ王の葬送慣習に影響され製作されたとの見解があれば、カルトナージュ（棺に用いられた、亜麻布や漆喰などを固めた材質）のマスクやアマルナ時代の肖像の原型との見解もある。ただし肖像は素材が異なり墓に納められなかったことから、これらの見解は批判も受けている[27]。予備「頭像」である理由を説明するにあたり留意すべきなのは、葬送において像が死者に邪悪な力を及ぼさないように首の部分で割ってから納めたという説である[28]。これはファイアンス製のカバの副葬品がカバの獰猛さを抑えるため肢部を破壊して納められたこと[29]と共通する災い除けの呪術としての効果を期待した儀式と言える。

古代エジプトの文字には様々な人物やヘビ、ハチなどの生き物の姿を模ったものも知られているが、現世の人々や被葬者に害を及ぼさないように、しばしばそれらの身体は分割された姿や欠損した姿、更には背にナイフを突き立てられた姿で描かれることもあった〔図 4〕。一方で人々や死者を守る護符の中には耳や鼻などの身体部位を模したものも製作され、死者の欠損した部位を補うために義肢や義指なども用意された。また A. ロクティオノフ（Loktionov）が指摘するように、刑罰としての新王国時代に鼻削ぎ・耳削ぎが執行されたが、身体の一部を奪うことには個人の機能や外見を損なうと同時に来世での復活の障害となるという前提があったと考えられる[30]。

これらの事項を踏まえると頭部の切断には四肢や耳鼻以上に宗教的な意味が強かったと言えよう。頭部に備わる感覚を司る身体部位が重視されるのは、生前のみならず死後も同様であったことにも留意したい。死者を送り出

す際の「開口の儀礼」[31] はあの世でも死者の口や目などが機能し、飲食や発言、視覚・聴覚等の感覚を使う事を可能にすると考えられたが、この儀礼において、被葬者を弔う神官の役割を担う息子によって被葬者の頭部が「白くなった頭」にならないようにと願う呪文が唱えられた。「白くなった頭」は白石灰岩の予備頭像とも解釈され、また石材の白い色は切断された傷口から血が大量に流れ出ることにより頭部が血色を失った様子を表しているとも考えられる [32]。L. シスト（Sist）が古代エジプトの彫像の色彩に関して考察しているように、赤色、青色および緑色は、黄色、黒色、そして白色という美術の基本色にはそれぞれ象徴的な意味が込められていたのだ [33]。この頭部の白色に対する解釈が妥当であるならば、予備頭像はともすると何か忌避されるべき力が宿る危険性が想定されていた可能性があり、それ故頭部のみを残して切断し、東地中海地域の頭蓋信仰のように守護する力に変換したと提起できるのではないだろうか。

文字の形としても、頭部に損傷のある人物の姿が表された例が知られている。ヒエログリフや壁画の人物図像などには次のような人物が描かれてきた。例えば A. ガーディナー（Gardiner）によるリストで A14 に分類される人物像は頭部から血を流して倒れているように見える。さらに A14A のように斧のような武器が頭部に刺さる人物の姿は壁画にも描かれており、自己犠牲や自殺、あるいは苦痛を表す姿勢なのかは不明確であるが、自ら手に持つ斧が前頭部に突き刺さっているものもある。

神話では、オシリスの王位を巡り、王子ホルスと王弟セトが戦闘を繰り広げる最中、オシリスの妹妃でホルスの母であるイシスは、息子に加勢しようとセトに向けた攻撃の手を緩めてしまい、そのことに憤慨したホルスが母親の首を刃物で刎ね、それを持って荒野に去ってしまう話も知られる。

以上のように、古王国時代以降の王朝時代において、首は単に身体の機能や外見を構成する要素ではなく、死後も魂が存在するという宗教的概念と切り離すことのできない個人の力の象徴であったと考えられる。次章では先王朝時代から初期王朝時代にかけての首斬りや首狩りの事例について具体的に整理、考察していく。

第３章　葬送の首斬りと王権の首斬り

1895 年の考古学者 F. ピートリー（Petrie）によるナカダの発掘調査では頭部が切り離された遺体が複数発見された[34]。同じくゲルゼなどの他の遺跡からも同様に発見されたが[35]、その要因・背景は明らかにされなかった。また象牙製飾り板やナルメル王の奉納用パレットは、先王朝時代に宗教の中心地であり古代エジプト語名でネケンと呼ばれた都市ヒエラコンポリス出土のものである。同パレットはホルス神殿の主要堆積物の中から発見された。首の切断は王権を誇示する儀式という支配者の特権、あるいは宗教と王権のトップとして支配者が行う人身供犠とも考えられる。

しかしながらその一方で先王朝時代の非エリート層の墓からも頭部のない遺体が見つかっている。一見この事例は王権と関連付けられる首斬りとは別個の背景を持っていると解釈するのが妥当であるように思われるが、本論考ではここから先王朝時代の首斬りには支配者による王権の誇示のみに限定されない、葬送と結び付く儀礼的な意味も含まれることを示唆できると考えたい。1996 年から 2004 年にかけて行われたヒエラコンポリスの調査において、ナカダⅡ A 期からナカダⅡ C 期にかけて、すなわち紀元前 3600 年から紀元前 3400 年頃の人々が葬られた同墓地 HK43 も発掘された。HK6 がエリート層の共同墓地であったのとは異なり、HK43 は労働者階級の人々が葬られていた。ここからは 260 基の埋葬墓から計 300 近い遺体が発見されている。被葬者の遺体にしばしば毛髪や皮膚、手指の爪、胃の内容物などが骨と共に残存していることはこの墓を特徴付ける発見であり、被葬者たちの年齢や性別、社会的地位などを推測することを助ける情報が抽出されることとなった。埋葬された人物のうち 16 ～ 65 歳の男女を含む計 21 人は頸椎に切創痕がある状態で発見されたことが知られる。その 21 人の中には、完全に首が切断された遺体も確認されている。首の切断痕の位置と大きさからは、通常鋭利な刃物によって人が死亡するよりも切断作業に時間がかかったこと、戦闘による殺害ではないことが推測されている。それ故何らかの儀礼として頸椎の切断が行われたと考えられたのである。ただし遺体の持ち主たちの命を絶つ儀式として首斬りを行ったか、彼らが死亡した後に儀式として首を切断したのか、その行為の目的と時系列は不明とされていた。

さらに21人のうち5人の若い男性の頭蓋骨の表面には、刃物でつけられたと思われる切創痕が最多で197箇所確認されている[36]。これらの切創は顔や頭蓋骨の内側には無いことから、頭皮を剥ぐ儀式が行われた痕跡と考えられる[37]。しかしこの儀式の目的も同じく明らかにされることはなく、また儀式の一環として頭皮を剥いだ意味についても議論は進んでいない。ここで、2002年のR.フリードマン（Friedman）らによるヒエラコンポリスにおける発掘結果の整理および分析を確認したい。フリードマンらは、頸椎に切創痕あるいは切断痕が認められる遺体の詳細に言及している。HK43で唯一銅製品が発見されたことで知られる245号墓に葬られた男性は喉を裂かれ、第2頸椎に切創痕が見受けられる[38]。

この男性のような方法で殺害された事例としては9人の遺体が該当し、前方から第1～第3頸椎や舌骨に刃物を当てられたことが分かっている。このうち147号墓から発見された高齢の男女2人は完全に首を切断されていた。男性は60歳以上、女性は50～59歳程であったと推測され、それぞれ頭部を胸部の前に置かれ互いに強く抱擁するような姿で埋葬された。共に頸椎には夥しい数の切創痕があり、男性の遺体には15以上も確認されている[39]。このような傷跡のある頭部や、手などの身体部位は樹脂を浸み込ませた植物繊維の布での表面に重ねられる、あるいは包まれる箇所もあった[40]。布は葬送のために生産されたと考えられ、このような当て布は遺体保存の初期手段であり、葬送に関連付けられる。切創痕や切断痕がみられる遺体に副葬品用意され、保存処置が施されたことから、首斬りによる殺害は、当時復活再生と切り離すことができない儀礼であったと言える[41]。

しかしながら2008年、フリードマンは共同研究において、世界各地にみられる頭皮剥奪の刑罰やピラミッド・テキストなどにおける完全体の王と不完全体にされた敵の対比などから首斬りや頭皮剥奪に刑罰の儀礼性を求めた。ナカダⅡ期の暴力による統制が背景となり[42]、共同体における社会不適合者への罰として遺体に首や四肢の切断や頭皮剥奪を施し、死後復活の障害や恥辱としたのではないかと考えたのだ[43]。ただしこの主張には、来世復活の阻止や恥辱として首斬りによる殺害や切断が行われたとすれば、地位からの忖度や家族への温情であったとしてもなぜ罪人に副葬品や布が与えられたのかという疑問が残る。ラメセス3世を暗殺したペンタウアー王子のミイラ

は王朝時代に不浄なものとされたヤギ皮をあてがわれたことが知られる[44]。

A. メイシュ（Maish）による 1998 年の研究でも、HK43 墓の被葬者の死因と処置について述べられている。まず 123 号墓では発見された二人の 18 ～ 20 歳程の男性は、舌骨や頸部の切創痕の角度や位置の分析や治癒痕の不在から鋭利な刃物で喉を切り裂かれて死亡したことが裏付けられる。24 号墓の損傷の激しい遺体は性別・年齢は不明だが、同様に治癒痕の無い複数の切創痕がみられる。120 号墓の 30 ～ 40 歳の女性は左後頭部の殴打により死亡したため頭蓋骨の半分が欠落しているが、胸の上で両腕を交差させ有機繊維で四肢や胴体を覆われている様から王朝時代のミイラ製作の非常に初期の段階のように考えられる[45]。それに加え、遺体の上に破壊された土器の破片が散乱していたことから、これらの被葬者の首斬り及び遺体の処置は葬送儀礼と来世への準備としての一連の儀式と結び付く可能性が指摘できる。

現在の耕作地から 1.5 キロメートル離れたワディ・アブ・スフィアンに位置する HK11 からは人身供犠を示唆する発見がなされた[46]。この事例がナルメル王の奉納用パレットや第 1 王朝の殉葬と全く同じ背景を持つとは断言できないが、HK11 は HK6 や HK43 と該当する時期が重なり、ナカダⅡB 期を主要としたヒエラコンポリスの人々の居住跡や儀式の痕跡が確認されることから、先王朝時代のこの地域で宗教的儀礼が日常から遠くない存在であったことが伺える。石製容器や土器、櫛、パレットなど、あの世のために用意された品々や生前に用いられた品々や布が出土しているが、儀式に際して捧げられたと考えられる家畜や野生動物、魚などの焼かれた骨も豊富にあり、中にはナカダⅡ C 期の廃棄場として使用された竪坑の一つから新生児 1 体の骨片も発見されている。フリードマンは土器の焼成材などに新生児の骨が紛れ込んだと推測している[47]。しかしながら、古代エジプトの王朝時代の夭折した子どものミイラから分かるように、新生児や子どもは大人と同様にしばしば副葬品を伴って葬られた。庶民の家でさえ、乳児や幼児を床下に埋葬するなどしていた[48]。それに対し、この新生児は HK43 の遺体のような処置もされず他の動物相などと同様に廃棄されており、また豊富な食肉資源として家畜を育てていたにも関わらず調達が非効率に思われる野生動物の骨も発見されていることから、ナカダⅡ期に供犠が行われたと考えることができないだろうか。また第 1 王朝時代の殉葬墓のような埋葬もなされな

かったことから、もし人身供犠の痕跡であるならばHK11の人骨は上野らによる分類で言う所の「供進」の側面が強いと解釈できるのではないだろうか。このように、HK11とHK43の人骨では出土した背景も行われた儀礼の意味合いも異なることが明白ではあるが、少なくとも先王朝時代のヒエラコンポリスで既に人身供犠や儀礼としての首斬りが行われていたことが分かる[49]。

ではこのような個々の首斬りの事例はどのような宗教的概念で結びつけられるのであろうか。X. ドゥルー（Droux）はHK43の事例やナルメル王の奉納用パレットから、先王朝時代の首斬りの目的としては以下3つの可能性があり、そのいずれかが該当あるいは幾つかが複合的に該当すると提唱した。1つ目は罪人あるいは敵への処罰（処刑）としての首斬り、2つ目は神への生贄（人身供犠）としての首斬り、3つ目は葬送儀礼としての首斬りである[50]。ただし同氏も述べているように、上記の境界は不明瞭である。そこで本論考ではさらに4つ目として、行為を捧げられる者を強化する呪術としての首斬りも新たに付け加えたい。非エリートの墓の遺体や王墓の殉葬遺体にみられる首斬り、ナルメル王の奉納用パレットなどに描かれた捕虜の斬首には、前者と後者の場面からは一見全く共通点が無いように思われるが、ドゥルーの主張のように一つの行為が複数の要素を背景として成り立つという考えはあらゆる事例に当て嵌めることができる。4つ目の目的は本論考において別個の要素であるのみならず、他の要素との接合点として機能するのではないだろうか。例えば、1つ目の目的は実際の戦勝記念や法的な処刑において行われたが、特に戦勝を祝う際に軍功がもたらされた感謝を示すために神に捕虜を捧げることもあった。それに加え、秩序の維持者である王が国家や神に刃向かう存在を制圧するという概念を表現するために伝統的に用いられる図像モチーフでもあった。前章で文字の種類に言及した際にも述べたが、敵や脅威的な存在は名が記されたり姿が描かれるだけでも害を及ぼす呪力を持つと信じられ、故にしばしばナイフが刺さった姿など不完全な状態で表現するという対策が講じられた程であったのだ。

ナルメル王の奉納用パレットの図像において、切断した敵の首を脚の間に置いたのはなぜなのか。この点に関して本論考では明確な結論を出すには至らないが、2つの可能性を挙げておきたい。イギリスのケンブリッジシャー

では、ローマ時代後期の墓地の 52 の遺体のうち 17 体が斬首され、パレットの捕虜と同様の姿で頭部が置かれていた[51]。古代ローマにおいて、首斬りは死者の復活を防ぐため、そして敗北した敵兵、犯罪者への処遇のために行われたことが知られている[52]。

ラメセス 6 世王墓の壁面には王の復活再生への道程や神々の世界を表現した図像が多数描かれている。『洞窟の書』に関連する図像の中には、黒塗りされた人の姿をとるオシリスの敵が倒されている様子が幾つもみられ[53]、ナルメル王の奉納用パレットなどに描かれた捕虜の処遇を彷彿とさせる。秩序に刃向かう黒い悪霊たちは両腕を背後に縛られて幾体も並べられており、ある時にはそれぞれ広げた脚元の傍に首を置かれて横たえられ、ある時には立ったまま列を成す体の前に全員の首が積まれ、またある時には跪いた状態で首を落とされている［図 5］。和田浩一郎も指摘するように、古代エジプトでは死霊への恐れから、次のような存在を宥める、あるいは呪力を抑制するための儀式、呪術を行ったことが知られている。例えば無事に復活を保障された「祝福された死者」はアクと呼ばれ、遺族や子孫から供養を受けて満足したり願い事をされたりするなど身近な存在である一方、場合によっては現世の人々に悪影響をたらすことも懸念された。またムトと呼ばれる危険な悪霊は、冥界の旅人のみならず現世にも災いをもたらすと恐れられた[54]。

また左右に広げられた脚に Y 字路の表象と通じる象徴性が込められている可能性もある。美術の表象の解釈では、Y 字路は人間そのものの象徴と考えられるという[55]。それに加えて、T 字や U 字と同様に天の神々と地の人間を繋ぐ存在、あるいは指叉のように間にあるものを束縛する存在であったと考えられないだろうか。この解釈には更に検討が必要であるが、ナルメル王の奉納用パレットに描かれた捕虜は頭を両足首の間に置かれて描かれていることから、首斬りの事例の中でも特に関連性があると思われる。V. デイヴィス（Davies）とフリードマンは男性生殖器の有無にこの手掛かりを見出している。捕虜の遺体 10 体は､5 体ずつを前後 2 列に並べて横たわる。王の行列から見て手前の列の右 2 体は両足先を左側に向けられ、生殖器が描かれているのに対し、他 8 体は両足先を内向きに揃えられ、生殖器が描かれていない。このことから頭部は男性生殖器と同程度の強い生命力を担うと信じられ、切断によりその力を喪失・抑制することで敵の存在を消滅させ

る意図があったと主張した[56]。しかし図像に描かれていることは実際の出来事を記録しているか否かに関わらず、描かれたものに象徴される事柄や状態を永遠に保持することを意味する。そこにはその儀礼を行う者、あるいは捧げられる者の力の強化という呪術的側面も根底にはあるのではないだろうか。

では王権のための兵士殺害にも呪術的な側面での役割があったとすればそれは何か。まず考えられる可能性は、葬送での殉葬と同様に、その行為を行うこと自体が王の永続的な生命力の支えと認識されていたことである。先王朝時代から初期王朝時代の途中まで、人物が囚人であれ奴隷であれ、殺害され共に埋葬されるとあの世で王の霊を守る護衛隊となると信じられたと考えられている[57]。例えば聖地アビドスの共同墓地に存在する初期王朝時代第1王朝のアハ王墓では、20歳前後から20代半ばまでの若い男性の殉葬遺体が発見されている[58]。またその儀礼が行われた背景によっては、戦勝記念として神に捧げる供物なども別個にあるいは複合的な可能性として挙げられるであろう。次章では「家臣の犠牲」と呼ばれる儀礼とそこでの首斬りについて考察することで、王権との結びつきにより重点を置き、首斬りの儀式に参加した人々が共有した宗教的概念が存在したことを述べたい。

第４章　家臣の犠牲と儀礼としての首斬りの盛衰

儀礼として行われる際の首斬りに呪術としての側面があることをより明確にするため、家臣の犠牲の特徴にも言及する。T. クリスパイン（Krispijn）が説明しているように、古代メソポタミアのウルの王墓地の場合、葬祭における若年者の人身供犠は被葬者への忠誠の最たるものであり、この儀礼により犠牲者は別世界（あの世）の者へと変化すると信じられた[59]。また月本昭男も、基本的にメソポタミアでは地下墓に埋葬され、儀礼は死者が地下の冥界に行き死霊として生きるための移行儀礼であると述べている[60]。では古代エジプトの場合はどうであろうか。古代エジプトにおける最古の家臣の犠牲は、少なくともナカダⅡ期に該当する紀元前3500年～紀元前3200年には行われていたと考えられている[61]。ヒエラコンポリスでは頭蓋骨が身体の骨から切り離された状態で埋葬された遺体が多く発見され、またナカダの墓1基には頭部と長い骨を壁沿いに安置した事例もある。先王朝時代からの埋葬

地であるアダイマ周辺からは喉を斬って殺害した後に首を切断したと思われる遺体が少なくとも 2 体確認されている[62]。先王朝時代から初期王朝時代にかけての首斬りを含む古代エジプトの儀礼的殺害を扱った J. ダイク（Dijk）による研究では、このような初期の支配者の共同墓地の遺体の出土から判明している人身供犠とその犠牲者の意味について考察されている[63]。彼は儀礼的な殺人行為を homicide と表現しているが、この語について少し補足しておきたい。

一般的に悪意を持って他人を殺す犯罪行為あるいはそのような事件は murder と表現されることが多く、例えば王位を狙う家臣が王を暗殺する、盗人が財産を奪って逃げるため通行人を殺すなどが該当するだろう。一方で、攻撃に対する自衛の結果として他人を殺してしまった、あるいは特定の基準から犯罪とみなされないような、意図の有無に関わらない殺人は homicide と表現される。古代エジプトの場合、犯罪の枠から外れた殺害には共同体の敵勢との戦いや刑罰としての捕虜や囚人への処置、犠牲を伴う儀式などが該当すると考えられるだろう。この分類から、先王朝時代から初期王朝時代にかけての支配者のために行われた首斬りを含む儀礼的な人身供犠は、この homicide に含まれるものとする。

ダイクは人身供犠の分類について整理しているが、そこでは古代エジプトの人身供犠は主に次の 2 つに分類されると考えられている。1 つ目は「儀礼的殺害」（ritual killing）である。人間を生贄とする多くの人身供犠がこれに該当する。具体的には、神へ捧げる儀礼として戦争捕虜や奴隷を殺害する行為を意味する。2 つ目は「家臣の犠牲」（retainer sacrifice）で、主君が亡くなった際に、あの世でも仕え守る人員として従者や高貴な身分の者を殺害するというものである[64]。この場合に用いられる retainer という語は、王に仕える直近の家臣のみならず、近親者の王族や王家のために仕えた専門技術者などあらゆる従者をも含めた広い意味で使用されていると考えるのが妥当であることに留意したい。

この犠牲は先行研究において「自己犠牲」の始まりとも評されることから、主要な墓主の親族や従者、奴隷など犠牲者を含めた儀礼の参加者が同じ宗教的概念を共有していたと考えられる。家臣の犠牲は時代・地域を越えて様々な形態の事例が世界各地にみられ、それらが慣習として生じるには 3

つの条件があると考えられている[65]。まず 1 点目は最古の農耕である根栽農耕が生業として発達している社会であることで、「より原始的な社会」では慣習に相当しないという。古代エジプトの場合イモ類やニンニク、タマネギやダイコンなどの栽培が知られる。2 点目は超自然的な存在と特別な関係を持つ王あるいは首長が人々を支配する中央集権的構造を持つ社会であることで、「より平等主義的な社会」ではみられない。3 点目は国家としての形態で、都市国家よりも領邦国家において慣習化されることが多いとされる。また家臣の犠牲が継続される条件としては、神への生贄とする人身供犠の継続が影響していると考えられる。例えば神への人身供犠が行われている場合、家臣の犠牲も継続されている。言い換えれば、神への人身供犠が中断あるいは消滅すると、それに伴い家臣の犠牲も姿を消してしまうのである。

古代エジプト先王朝時代から慣習として継続された主君の葬送に伴う家臣の犠牲においても首斬りを施される犠牲者がいたことが分かっているが、この慣習は第 1 王朝時代の後期に行われなくなっていき、それに伴った目的として行われる首斬りも衰退したと考えられる。このような人身供犠はどのような要因のために衰退し、それと共に宗教的概念はどのように変化したのだろうか。

エジプト王国による植民地支配や第 25 王朝のファラオを輩出したことでも知られるヌビアにおいても家臣の犠牲が行われていた。そこでの慣習と第 1 王朝後期まで踏襲された古代エジプトの家臣の犠牲の盛衰の様相には相違点もみられることが分かっている。まずヌビアにおける家臣の犠牲について確認する。本論考において、地域としては下ヌビアと上ヌビア、そして文化集団としてはヌビア A グループとヌビア C グループという呼び名を用いる。ヌビア人の王権と人身供犠には、次のように古代エジプトとの接触が関わっていた。下ヌビアの A グループが繁栄した紀元前 3500 年から紀元前 2800 年には、早くも王族同士の交流によりエジプトからの文化的影響を受けていたことが王権に関連する図像表現から分かっている。しかしエジプトとヌビア人の対立が顕著になると、古王国時代にエジプト王が軍事遠征を行い A グループの人々を支配下に置いた。

一方で第 3 急湍南の C グループは、エジプトの植民地化を免れ、紀元前 2000 年から紀元前 1500 年頃まで農耕牧畜やエジプトとの交易を営みなが

ら繁栄することとなった。紀元前1700年頃ヌビアにはエジプトの国力衰退と反比例してCグループの「クシュ王国」が拡大し、強大国家「ケルマ王国」として南部エジプトから北部スーダンまでを支配下に収めた。王墓から豪華な副葬品と動物、白骨遺体などが発見されているが、このような家臣の犠牲は紀元前1700年頃から紀元後5・6世紀頃まで行われた[66]。しかし紀元前1500年頃、エジプトのヌビア全土支配により王国が滅亡し、アメン神などエジプトの信仰が土着信仰に流入および融合する。またエジプト第20王朝のヌビア総督によってヌビアにおける家臣の犠牲が中断された。この慣習が復活したのはエジプト支配後であり、ピイの先王たちのクシュ王墓では王妃などを殺害、埋葬する人身供犠が再び行われることとなった[67]。紀元前747年にはヌビア人ピイがエジプトを支配し、テーベ拠点の第25王朝開始の契機となる。ヌビア人エジプト王によるエジプト文化の復興では埋葬形式の融合も行われた。またメロエ時代には、紀元前270年から紀元前260年頃まで在位したアルカマニ王がメロエ南に王墓地を移動し、ヌビアの伝統としての家臣の犠牲を再開した[68]。このように、ヌビアの家臣の犠牲はエジプトとの文化接触や異国の支配、独立など外部からの影響を受け、王家を中心とした文化的自己同一性となり盛衰したことが分かっている。

古代エジプトにおいて行われた家臣の犠牲は、主に先王朝時代から初期王朝時代第1王朝後期にかけて確認されている。アビドス、ヒエラコンポリスなどの王墓地からは王妃や専門技術者、馬、副葬品などが出土している。アハ王墓では、それぞれの副墓から木棺に納められた20歳頃から25歳以下の男性の白骨遺体が36例確認されている[69]。このように来世で被葬者に伴う従者とするための殺害は、第1王朝後期に段階的に事例が減少したとみられ、それ以降の王朝時代ではデルタ地帯の遺跡からも儀礼の可能性を伺わせる遺体が発見されたが初期王朝時代までとは異なる背景を持つ。中王国時代後期に年代付けられるテル・エル＝ダバアのカナン人居住区の墓のうち、3基は入り口付近にロバと共に人間（1例は完全体の2人）が出土している。またローマ時代と考えられるテル・エル＝バラムンのマスタバ墓風の埋葬墓でも被葬者以外の遺体が発見されている[70]。

なぜ家臣の犠牲は第1王朝後に「エジプト的」な王家の伝統から姿を消したのだろうか。従来の議論では、倫理観すなわち人命の価値の変化が主な

要因とされた。家臣の犠牲は上エジプトを中心に生じたものの、後に北方からの「文明化」を受けて廃止されたと考えられた。これに対しダイクは社会的・経済的要因を提案した。先王朝時代から行われた家臣の犠牲は確かに上エジプトに多く事例がみられるが、第 1 王朝後の衰退に関しては外部に影響を受けた倫理観の変化が要因と断言することは難しいと考えられる。それに加え、初期王朝時代の木製ラベル〔図 5〕からは宗教儀礼としての人身供犠との関係も考えられる。犠牲者の社会的地位は明白ではないが、腕を後ろに拘束され跪く表現が特徴である。犠牲者の胸を刺して血を集める人物に関しては、宗教儀礼を執り行う王とも、王族ではなく祭司[71]とも解釈されている[72]。このような人身供犠を思わせる場面は第 1 王朝後には描かれなくなった。このことから、家臣の犠牲と他の人身供犠との相互関係による衰退も可能性として挙げられる。また R.A. キャンベル（Campbell）は、第 1 王朝期の新王たちが古参勢力である前王の親族や支持者たちの蜂起を防ぐために粛清したが、王宮の人員が減少し、家臣の忠誠心を維持するための懐柔策として第 2 王朝期の王が慣習を放棄したと主張している[73]。この政治的要因説では王権との関わりが強調され得るだろう。

第 1 王朝後期以降、支配者のための人身供犠は何に取って代わられたのだろうか。また、宗教的儀式における人間の首斬りの役割はそのような人身供犠と共に衰退する過程で姿を消したことが分かっているが、その後の王朝時代に影響を残したとすればそれはどのような形態に変換されたと言えるのだろうか。ナルメル王の奉納用パレットの図像表現からは、王朝開始直前には首斬りにおける葬送儀礼とは別の側面として、敵による災いを阻止し支配者の力の強化へ転じる意図を持つ儀礼の側面が大きくなったことが推測できる。そのことは首が霊力を担うと考えられたが故に、パレットでは切断し両脚の間に封じるという不完全な姿で敵を描き呪術的な支配を表したと考えられるからである。その後、被葬者のために来世へと従者を送るための人身供犠は古王国時代以降の召使いの彫像や、シャブティと呼ばれる人形の製作・副葬に変化したと考えられる。また古王国時代のギザの墓地でも切断された首を傍に置いて埋葬された遺体が発見されているが、彼らの場合は処罰とも、あるいは生者への災い除けや死後の幸福のためとも推測されている[74]。そして、首斬りが登場する場面は、王朝時代の『洞窟の書』にみられる敵の

処罰や法的な処刑、あるいは棍棒で異民族や敵の頭を殴打する王の伝統図像へと分化していった。以上のように、先王朝時代において首を斬る行為は純粋な神への生贄としての人身供犠のみならず、葬送儀礼、政治的儀礼としての側面を備えていたが、これには人々が首に畏れるべき呪力が備っていると信じていたことが根底にあると考えられるのである。

おわりに

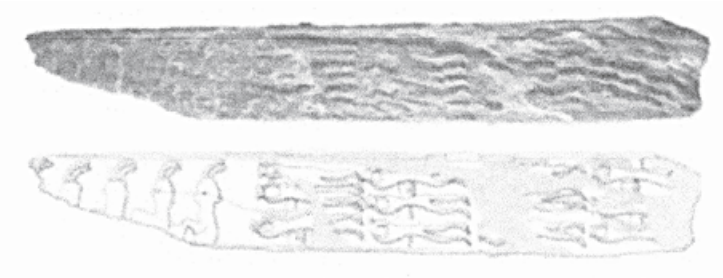
王権の強化に結び付く人身供犠に関する分析の一環として、先王朝時代から初期王朝時代の遺体や図像を中心に、儀礼としての首斬りとその基盤となる宗教的概念からみた王権との繋がりについて考察した。以下、本論考で首斬りの持つ意味を明確にした結果を提示する。

1）先王朝時代の宗教的中心地であった都市ヒエラコンポリスにおいて、首斬りの儀礼は王権との結び付きが顕著であったが、王族以外の葬送において再生装置としての儀式とも結び付けられることから、共同体の人々に共有される、あらゆるものに不可視の力を見出す宗教的概念から生じた可能性がある。
2）被葬者の死後の従者とするための殺害で首斬りを行う慣習と、被葬者の復活を促す儀礼における首斬り、王が敵の復活再生を阻止するための首斬りの儀礼は、一見行為の対象者や意図、背景が異なり別個の事例としか思われない。しかしながら、古王国時代の予備頭像のようにあえて重要な身体要素を破壊することは、「結果としての首狩り」や「厳密に言ふ」所の供犠と同様にその行為を捧げる者に肯定的な意味合いを与えるという宗教的概念を共同体の当事者たちが共有していたことを示唆する可能性がある。
3）またナルメル王の奉納用パレットを特徴づける、敵の両脚の間に頭部を置く意味は何であったのか。生殖器と共に切断されていることはその犠牲者の復活を阻止する手段とも考えられるが、そこには東地中海世界における頭蓋信仰以前の首およびそれに伴う呪力への恐れが根底にあると考えられる。すなわち首斬りの図像および行為は王朝以前の呪術と王権強化の結びつきの一例とみることができるのではないだろうか。

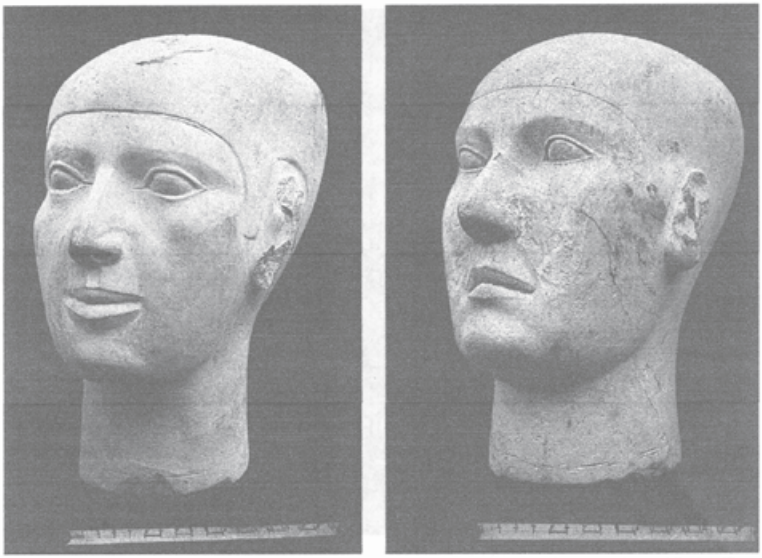
王が戦争捕虜を殺害する行為としての首斬りが政治的儀礼と密接に結びついていることは明白だが、世界の秩序を維持する古代エジプト王の生命力や権力が永続的に続くという宗教的概念が基盤となっているが故に第 1 王朝後期まで継続されたことは古代エジプトにおける事例の特徴と言える。それ故、ナルメル王の奉納用パレットやヒエラコンポリス出土の象牙製飾り板などに描かれた行為や捕虜を含む王墓の殉葬は、単に政治的儀礼という枠組みのみに当て嵌められるものではなく、その行為を捧げられた王の存在や力を強化するという効果が期待される呪術的な側面があると考えられるのである。

参考図版

〔図 1〕ナルメル王の奉納用パレット：図版左の表面では王の行列や斬首した遺体、右の裏面では棍棒を敵に向かって振り上げる王などが描かれている。S. Hendrickx and F. Förster, Early Dynastic Art and Iconography, A.B. Lloyd (ed.), *A Companion to Ancient Egypt* vol. 2 (Malden, 2010), p.827.

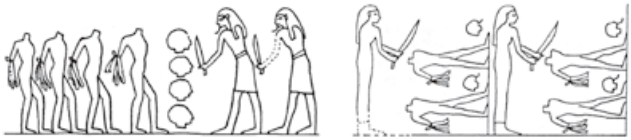


〔図2〕ヒエラコンポリス出土の象牙製飾り板：X. Droux, Headless at Hierakonpolis, *Nekhen News* vol. 19 (2007), p.14.



〔図3〕ギザの墓から出土した予備頭像：喉元の切断面付近に線刻が確認される。N. S. Picardo, ‘Semantic Homicide’ and the So-called Reserve Heads: The Theme of Decapitation in Egyptian Funerary Religion and Some Implications for the Old Kingdom, *Journal of the American Research Center in Egypt* vol. 43 (2007), p.230.

〔図 4〕元の形から欠損あるいは切断された文字の例 : Ibid., p.234.



〔図 5〕ラムセス 6 世墓に描かれた『洞窟の書』の場面 : Ibid., p.225.

〔図 6〕サッカラのマスタバ 3035 号墓出土の木製ラベル。第 1 王朝ジェル王の治世のもの : E. F. Morris, Sacrifice for the State: First Dynasty Royal Funerals and the Rites at Macramallah's Rectangle, Nicola Laneri (ed.), *Performing Death. Social Analyses of Ancient Funerary Traditions in the Mediterranean* (Chicago, 2018), p.31.

註

[1] ナルメル王の奉納用パレットの研究動向に関しては以下の著書が詳しい。W. Davis, *Masking the Blow: The Scene of Representation in Late Prehistoric Egyptian Art*（California, 1992）.

[2] U. Matic, On Typhon, Red Men and the Tomb of Osiris: Ancient Interpretations and Human Sacrifice in Egypt: Ancient Interpretations and Human Sacrifice in Egypt, in V. Mihajlovic and M. Jankovic（eds.）, *Pervading empire: Relationality and Diversity in the Roman Provinces*（Stuttgart, 2020）, pp.15-28.

[3] 葬列の参加者の災い除けとして「セジュ・デシェルウト（赤い土器を壊す儀式）」が行われた。和田浩一郎『古代エジプトの埋葬習慣』ポプラ社、2014 年、123-125 頁。

[4] H. フランクフォート著、曽田淑子、森岡妙子訳、三笠宮崇仁監修『古代オリエント文明の誕生』岩波書店、1962 年、20-23 頁。（H. Frankfort, *The Birth of Civilization in the Near East*（London ,1951）, pp.26-28.）

[5] 同、22-28 頁。

[6] 杉勇他訳『筑摩世界文學大系 1: 古代オリエント集』筑摩書房、1978 年、420-421 頁 ; 大城道則『神々と人間のエジプト神話 : 魔法・冒険・復讐の物語』吉川弘文館、2021 年、92-95 頁。

[7] R. Friedman, E. Watrall, J. Jones, A. G. Fahmy, W. V. Neer, V. Linseele, Excavation at Hierakonpolis, *Archéo-Nil* vol. 12（Paris, 2002）, pp. 55-68.

[8] 山田仁史『首狩の宗教民族学』筑摩書房、2015 年、24 頁。

[9] 同、24-25 頁。

[10] 同、41-56 頁。

[11] 同、42-43 頁 ;「野獣の主」とも。大林太良「インドシナ焼畑耕作民における狩猟信仰と狩猟儀礼」『一橋論叢』第 64 巻第 1 号、1970 年、17-35 頁 ; またオホーツク文化の動物信仰はアイヌにおける「山の神」「海の神」という二分制の「動物の主」信仰に影響を与えていると考えられる。宇田川洋「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 8 巻、1989 年、1-42 頁。

[12] 山田、前掲書、43-44 頁。

[13] 同、44-45 頁；アムール下流域の事例では穀物農耕を主とする人々との文化接触も示唆される。中国を起源とする死霊から生者への災い除けと思われる豚の頭骨や下顎骨を住居内外に保存する習俗がもたらされ、その後オホーツク文化においてクマの首塚へと習俗へと転化し、サハリンを通じて 20 世紀まで北方狩猟民にみられた熊祭りとして伝播したと考えられる。春成秀爾「熊祭りの起源」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 60 巻、1995 年、57-106 頁。

[14] 山田、前掲書、51 頁。掘棒農耕だけではなく手鍬農耕においても焼畑が行われていたことが知られる。焼畑を行う人々の首狩りの事例に関しては以下を参照。大林、前掲書、1970 年、17-35 頁。

[15] 農耕民の首狩りは危険な外部世界への働きかけであり、死というマイナス要素を共同体内部の豊穣性を活性化させるプラス要素に転じる慣習ともみなされる。木佐木哲朗「人がなぜ人の首を狩るのか？」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第 33 巻、1996 年、59-70 頁。

[16] ただし首の切断が殺害後に行われたのではないかという批判も議論の中で生じていた。山田、前掲書、2015 年、32-34 頁。

[17] 高橋吉文「反復で読み解くグリム童話入門 第 2 章 西洋人は首狩り族」北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院『メディア・コミュニケーション研究』56 巻、2009 年、1-53 頁。

[18] メデューサはその起源の一つとされるフンババと同様に膝を曲げた姿で表される他、切断された頭部のみが出入り口などの守護として飾られたことが知られる。またヘビの姿をとるオリエント女神とも結び付けられる。M. R. Dexter, The Greco-Roman Medusa and Her Neolithic Roots, in E. Turcanu, C. E. Ursu（eds.）, *Materiality and Identity in Pre-and Protohistoric Europe: Homage to Cornelia-Magda* Lazarovici（Suceava, 2018）, pp.463-482.

[19] D. Wengrow and J. Baines, Images, human bodies, and the ritual construction of memory in late predynastic Egypt, in S. Hendrickx, R. Friedman, K. Cialowicz and M. Chlodnicki（eds.）, *Egypt at Its Origins*（Leuven, 2004）, pp.1097-1100. 頭部が埋葬されていない遺体、両脚の間に頭部を置かれて埋葬された遺体、頭部が無くその位置に壺が置かれた遺

体など様々な事例が発見された。

[20] R. Friedman, A. Maish et al., Preliminary Report on Field Work at Hierakonpolis: 1996-1998, *Journal of the American Research Center in Egypt* vol. 36（1999）, pp.1-35.

[21] X. Droux, “Headless at Hierakonpolis”, *Nekhen News* vol. 19（2007）, p.14; 大城道則『ピラミッド以前の古代エジプト文明：王権と文明の揺籃期』創元社、2009 年、70 頁。

[22] 日本国内の人身供犠の祭事に関しては、六車は議論における暴力性の緩和を「毒抜き」と呼び懸念している。六車由実『神、人を喰う』新曜社、2003 年、25-48 頁。

[23] 上野専精、後藤覚禅、勝正雄「供犠の研究」『駒沢大学仏教学会年報』第 6 巻第 2 号、1936 年、152 頁。また同箇所において、「生きた事実として見る」宗教は「宗教的表象」すなわち観念とそれを外に現すための「宗教的態度」すなわち儀礼に分けられ、後者の儀礼の中核を懺悔などの自浄の行や祈祷と共に構成するのが供犠であると述べられている。

[24] 巨大な角を持つ牡牛には守護としての呪力が期待され、サッカラのマスタバ墓では牡牛の両角を挿した粘土製の頭骨模型が、ケルマ時代のヌビアの墓では両角を持つ本物の牡牛の頭骨が墓の前に並べられた。大城道則『ピラミッドへの道：古代エジプト文明の黎明』講談社、2010 年、51 頁、図 17・図 18。

[25] 西村洋子「古代エジプトにおいて墓地管理はどのようであったか？」『奈良史学』第 21 巻、2003 年、87-91 頁。

[26] 予備頭像を観察すると、控えめではあるが表面に刻線を入れることで毛髪との境も表わされていることが分かる。王朝時代の表現には、毛髪を含む頭部を捕える場面もみられる。王が敵を打倒す古代エジプトの伝統的な図像表現では、一方の手に棍棒を持って振りかざし、もう一方の手に複数名の敵の頭髪を束ねるように持って捕える姿が戦勝を誇示するように繰り返し描かれたのだ。本来個人のものである頭髪を他者に委ねるという構図は支配関係の表れと言える。このことから、人物の自己同一性としての毛髪は予備頭像でも無視することのできない要素であったと言える。

[27] M. Nuzzolo, The Reserve Heads: Some Remarks on Their Function

and Meaning, in N. Strudwick and H. Strudwick（eds.）, *Old Kingdom, New Perspectives. Egyptian Art and Archaeology 2750-2150 BC.（Proceedings of the Old Kingdom Art and Archaeology Conference, held May 20-23, 2009 at the Fitzwilliam Museum in Cambridge）*（Oxford, 2011）, pp. 205-207.

[28] N. S. Picardo, 'Semantic Homicide' and the So-called Reserve Heads: The Theme of Decapitation in Egyptian Funerary Religion and Some Implications for the Old Kingdom, *Journal of the American Research Center in Egypt vol. 43（2007）, pp. 230-232; Nuzzolo, op. cit*., p.209.

[29] L. Evans, *Animal Behavior in Egyptian Art: Representations of the Natural World in Menphite Tomb Scenes*（Oxford, 2010）, p.137; S. Maydana, Hippopotamus Hunting in Predynastic Egypt: Reassessing Archaeological Evidence, *Archaefauna* 29（Madrid, 2020）, p.142.

[30] A. A. Loktionov, May My Nose and Ears be Cut Off: Practical and "Supra-practical" Aspects of Mutilation in the Egyptian New Kingdom, Brill, *Journal of the Economic and Social History of the Orient* vol. 60, 2017, pp.278-286.

[31] 古王国時代第 4 王朝には既に慣行となっており、当初はカアが宿る彫像が供物を食べることを可能にするための儀礼であった。新王国時代にミイラや棺に対して行われるようになった。和田、前掲書、2014 年、132 頁；大城道則「ツタンカーメン王墓にみる古代エジプトの死生観」、大城道則編著『死者はどこへいくのか―死をめぐる人類五〇〇〇年の歴史』河出書房新社、2017 年、75-96 頁。

[32] このことから予備頭像の破壊は先王朝時代の人身供犠に関連付けられている。Nuzzolo, *op. cit*., 2011, p. 209. また破壊行為は死者の悪い呪力を防ぐ生者のための儀礼とも考えられる。Picardo, *op. cit*., 2007, p.232.

[33] L. Sist, The Use of Color in Egyptian Statuary, in V. Angenot and F. Tiradritti（eds.）, *Artist and Painting in Ancient Egypt*（Montepulciano, 2016）, pp.19-28.

[34] ナカダにおける出土物に関しては以下を参照。ピートリーらは頭蓋骨が移動・再配置されたと認識した。W. M. F. Petrie and J. E. Quibell, *Naqada*

and Ballas（London, 1896）.

[35] ウェインライトは以下の頁において頭蓋が葬送時の事故や盗掘ではなく埋葬時には切断されていた可能性を示している。W. M. F. Petrie, G. A. Wainwright and E. Mackay, *The Labyrinth Gerzeh and Mazghuneh*（London, 1912）, pp.8-11.

[36] S. P. Dougherty and R. Friedman, Sacred or Mundane: Scalping and Decapitation at Predynastic Hierakonpolis, in B. Raynes and Y. Tristant（eds.）, *Egypt at Its Origin* 2（Leuven, 2008）, p.323.

[37] Maish, Not just Another Cut Throat. *Nekhen News* vol.15（2003）, p.26.

[38] R. Friedman et al., *op cit*., 2002, pp.63-64.

[39] A. Maish, Trauma at HK43, *Nekhen News* vol. 10（1998）, pp.6-7; Friedman et al., *op. cit*., 2002, p.65.

[40] Maish, *op. cit*., 1998, p.7; Friedman et al. *op. cit*., 2002, pp.65-66.

[41] フリードマンらは葬送儀礼および儀礼的切断が死後の身体の再構築あるいは再「創造」を意図して行われた可能性があるとも述べた。Friedman et al., *op. cit*., 2002, p.65.

[42] HK43 で F.W. グリーン（Green）の収集方針により見過ごされていた発見として（Dougherty, 2003）、メイス・ヘッドのような鈍器により損傷した頭蓋や身体を持つ遺体がある。ここから、先王朝時代後期のヒエラコンポリスが上下統一前の地域間の闘争の渦中にあったとも推測されている。W. E. Potter and J. F. Powell, Big Headaches in the Predynastic: Cranial Trauma at HK43, *Nekhen News* vol.15（2003）, pp.26-27. ただしヒエラコンポリスが緊張状態にあったものの、統一国家形成過程で戦争が主な要因となったとは現時点では断言できない。河合望『古代エジプト全史』雄山閣、2021 年、52-54 頁。

[43] S. P. Dougherty and R. Friedman, Sacred or Mundane: Scalping and Decapitation at Predynastic Hierakonpolis, *Egypt at Its Origin* 2（Leuven, 2008）, pp.328-332.

[44] Zahi Hawass et al., Who Killed Ramessess Ⅲ ?, *British Medical Journal* vol. 345, no. 7888（London,2012）, p.40.

[45] Maish, *op. cit*., 1998, p.6.

[46] Friedman et al., *op. cit*., 2002, p.61.

[47] S. P. Dougherty and R. Friedman, *op. cit*., 2008, p.328.

[48] 和田、前掲書、284-288 頁。

[49] 近年、ヒエラコンポリスなどで出土したナカダⅡ期のこのような遺体は、初期王朝時代の王墓地にみられる殉葬の先駆けとみなされている。河合、前掲書、2021 年、45 頁。

[50] X. Droux, Headless at Hierakonpolis, *Nekhen News* vol. 19（2007）, p.14.

[51] R. Wiseman, B. Neil and F. Mazzilli, Extreme Justice: Decapitations and Prone Burials in Three Late Roman Cemeteries at Knobb's Farm, Cambridgeshire, *Britannia* vol. 52, (2012), pp.138-149.

[52] Ibid., pp.152-163; ただし以下の事例からは斬首が地位の高い者に選択が許される名誉的な処刑方法であったとも考えられている。J. Montgomery, C. Knüsel, and K. Tucker, Identifying the Origins of Decapitated Male Skeletons from 3 Driffield Terrace, York, through Isotope Analysis: Reflections of the Cosmopolitan Nature of Roman York in the Time of Caracalla, in M. Bonogofsky（ed.）, *The Bioarchaeology of the Human Head: Decapitation, Decoration, and Deformation*（Florida, 2011）, pp.141-178.

[53] N. S. Picardo, 'Semantic Homicide' and the So-called Reserve Heads: The Theme of Decapitation in Egyptian Funerary Religion and Some Implications for the Old Kingdom, *Journal of the American Research Center in Egypt* vol. 43（2007）, pp.224-225.

[54] アクには供物の奉納、ムトには呪文を記した人形や土器を破壊する儀式を行った。和田、前掲書、40-45 頁。

[55] 神原正明『ヒエロニムス・ボス：奇想と驚異の図像学』勁草書房、2019 年、240-274 頁。

[56] V. Davis and R. Friedman, The Narmer Palette: A Forgotten Member, *Nekhen News* vol.10（1998）, p.22.

[57] E. F. Morris, Sacrifice for the State: First Dynasty Royal Funerals and the Rites at Macramallah's Rectangle, in N. Laneri（ed.）, *Performing Death. Social Analyses of Ancient Funerary Traditions in the*

Mediterranean（Chicago, 2018）, p.20.

[58] Ibid., p.19.

[59] T. J. H. Krispijn, Ritual Killing of Humans in Ancient Mesopotamia, in K. C. Innemée（ed.）, *The Value of a Human Life*（Leiden, 2022）, pp.27-39.

[60] 月本昭男「古代メソポタミアにおける死生観と死者儀礼」『西アジア考古学』第 8 号、2007 年、3-4 頁。

[61] ナカダⅡ期。J. Dijk, Retainer Sacrifice in Egypt and in Nubia, in J. N. Bremmer（ed.）, *The Strange World of Human Sacrifice*（Leuven, 2007）, p. 137.

[62] Ibid., 2007, p.137; 山田は刑罰の可能性を述べているが、同事例に言及している。山田、前掲書、98 頁。

[63] Dijk, 2007, p.136; Id., Ritual Homicide in Ancient Egypt, in K. C. Innemée（ed.）, *The Value of a Human Life*（Leiden, 2022）, pp.41-52.

[64] Ibid., pp.41-42.

[65] Dijk, *op. cit*., 2007, p.151.

[66] Ibid., p.144.

[67] 大城道則『異民族ファラオたちの古代エジプト―第三中間期と末期王朝時代―』ミネルヴァ書房、2022 年、133 頁。

[68] Dijk, *op. cit*., 2007, p.146.

[69] R. A. Campbell, *Kill Thy Neighbor: Violence, Power, and Human Sacrifice in Ancient Egypt*（California, 2019）, pp.177-178.

[70] 1978 年に発掘したマンスーラ大学調査隊は、多くの出土物が年代付けられる末期王朝時代よりもはるかに早い時期の墓と推測したが、ダイクはむしろ新しい時代のものと述べている。Dijk, *op. cit*., 2007, p.144.

[71] Ibid., 2007, pp.151-152.

[72] M. Ohshiro, Decoding the Wooden Label of King Djer, *Göttinger Miszellen* no. 221（2009）, pp.57-64.

[73] Campbell, *op. cit*., pp.325-328. またダイク（2007）は家臣の犠牲は貴族の有力家系から選出された「集団的犠牲」とも述べているが、キャンベルは犠牲者の墓から王からの見返りの記録がないことからこのコミュニティ形成としての役割に疑問を呈している。Ibid., pp.330-331.

[74] GE19 号墓などから首が切断された遺体が発見されているが、古王国時代の埋葬としては一般的ではなかったとされる。M. Lebedev, M. Dobrovolskaya, M. Mednikova, A Case of Decapitation from Giza, Czech Institute of Egyptology, *Prague Egyptological Studies* No. XXI (2018), pp.106-119.